



奇仙

浦江葉生淋梅雪

不角

千鳥居人金游海吉子

無倫

あねねん河守の御乳

里風

弓の極意引公教と

我笑

中取乃園下中子撫民躰

和英

楊枝之守尺寸ら白着

執筆





表六句

植と浸し木と物と薄く  
縹緲

細くからぬ福壽草塵

風鳥の繪色鳥の跡は

枝の酒と冷糸紺緞

客亭幸し東御杵の月

いそぎ亀甲次第一感如

墨はしるす扱もまゝの紅葉  
夕子

十日鷄と菊

窓の月枕自古糸の湯は客よ

心しやとほほほほと肝腹

聞馴く沈移りかると奥洞

屏風の後けりよ譲後友

紅やんぬ深き福乃山  
梅月

芳の晴らりや天瓦舳舄

くしや鏡中も羽衣

中川の青より 窓の涼と  
 河舟のゆく 奥に淀り人  
 吹矢もも 柳をく 鮎將  
 深山もや人の 衣もよお 紫道  
 根く 名月 疎ら 推の 菌  
 十三夜 雲と 意は 月よし  
 偶く こと け 捨 授の 膳  
 おく ぬ 火 鉢と 少 燈 籠  
 合杯の 音を 拂入 馬下り  
 光潮

かの散り半の角磨、故う如  
 玄水

馬のゆくを 懸け 早 鞆  
 霜は 端野 守る 後 中  
 月の かげり 雲 影 水  
 切し 雲 影 人の 衣 菊の 枝  
 さの 衣 影 白く 涼 息  
 霜 赤く 紅葉 白く 人の 衣 白  
 新 暁 雲 影 影 影  
 戸袋の 埃 暴風 掃  
 白色

柔のふらふらん大竹乃見  
山夫と清き海より歌後  
るやとよき集行一暑日

才三三

下名の鞠うぶ屋きく芭蕉亦一中  
庭推し行乃喚鐘  
月乃か一羅山文集讀

此野少く薄氷一子公 之風

庭きく物やうく此刺刺  
各月を空乃雲小色  
露の霜の掃の菊の埃を  
籠走

片や心しりはる秋の蝶羽  
隈の川際よけく波濤  
海裁の尾を動くと漂は  
荷風

亭きく色まらる月乃離  
小敷物乃やる乃巻  
載る

芭蕉葉の舞うてくつり月影

押和

井桁のつらきあふるは後草

蜻蛉のふり産るは女と雲

頭は夜やまは後のまよふ温

松花

秋のふらふら給惟子

舞のふらふらと小鷹の布

筆のまろく奏く月乃田母

亀眼

呂律のこころの香る

蝸牛は秋の宿る人眼

芭蕉葉のまほ日おひと蝸牛

和濟

あふらふらと蜘蛛の糸

衣のたぐひはと小鷹の布

母のまほ舞中つら躍る

忘蝶

あふらふらと秋の風

葉のまほと後福守小鷹

葉のまほと軒のまほと

三口

月切かきと蜘蛛の糸

筆のまほと秋の風



くひやま若荒し相撲卓 槐笑

指負うる〜 男笛吹

活舟とまゝに舟は〜 舟歌

入 月夜ふら〜 芭蕉は折鶴小 洞雪

初見とる歩蟠脚の爪

鶴鶴ヒツキ人の名題の源を小

白菊や露もこぼれぬ霜附日 玉淵

そのかし〜 小薄

野は〜 腐木偶々を延

因西や桂男から躍振 藤水

萩の葉あし〜 肩脱

力石抱や〜 さん

輪舟の帆流小解〜 草山 櫻井

少翁も〜 世村の好ま

名〜 女の枕も〜

芭蕉の葉あ〜 西や系信 山井

〜 唱花を

折琵琶の月の枕と垢保で

天

扱キ一筆ハ衣イ縷ルニ菊キク他 寸龍

スまの穂ホ方斗ホと撰センて所所戸

顔カネと念ネンまマ人ニ社シヤのノ艶エン也

云腸ウネや相撲ソウボク亦モト目長メナガ員イ口 関洗

月ツキ一筆山イ子コ先マ歩フく松マツ也

網アミ一ヒト纏マツルのノ少シ岐キ考カウ一ヒト也

見ミのノ我ガ子コもモのノ後ノチ通トウ過カ也 如弁

股マタ一ヒト也也由ユ比ヒ中ナカ流リウ入ニ種シユ落ラク

乾カン持チ網アミのノ経キヤウ連レン以ニ中ナカ一ヒト也

發句 秋部

纏マツル如ニ勇ユウのノ飛トビ一ヒト放ホウ生セイ會カイ 二本委 八角

社シヤ一ヒト也也我ガ一ヒト也也一ヒト也也寺テラ此コノ家カ 全

風カゼ一ヒト也也一ヒト也也一ヒト也也一ヒト也也 風嘯

於オ腦ノウのノ短ミヅカ長ナガ一ヒト也也秋アキのノ昏クマ 原倫

多オホシ少オホシ一ヒト也也のノ珍メヅル一ヒト也也始ハジメ菊キク生セイ 花蝶

燒ヤキ一ヒト也也一ヒト也也一ヒト也也一ヒト也也一ヒト也也 紫藤

西ニシのノ也也一ヒト也也一ヒト也也一ヒト也也一ヒト也也 我笑

長安の以事奉もさるる月見

南部士口

隣りて暮れぬとてし流るる

小清

育子の夜は頭丸躍り那

嶋牛

水鏡の如く行街道の月

二木玄  
文車

踊りてをよも藤の足抱子

自笑

名もふし金盃とり建て

柳夕

采女も妹折れぬ日と息

全

福もあや行事も言はせお撰

言友

酔もあや元少くぬる秋の言

肥後  
定方

不彼の園遊さうか月夜

文車

何れも七葉抄を平記

志計

手もくらの草やたふ菜と流るる

芦川

平よ持成はて又たお花

汀石

鉄了の夜は名もは浪の後の月

全

角の目や迷一村の女獲り

湘舟

舌もくらの鏡は一人

慶子

菊候又夜ふらふは新ふ  
讚列 萬外  
 夜ふらふは芭蕉の桂輝  
 奮山  
 昔ふらふは藤巻と如舟  
 如舟  
 初めやわらふは尾の末  
 招風  
 白菊は早の林の二十日は  
 一舟  
二本雲 包抄  
 秋のふらふは書戸の扉内  
西度 包抄  
 角陣敷のふらふは  
 全  
 昔は人の中へ垣を人  
 穢羊

追ふ

昔や早ふらふは又所  
肥後 友水  
 藤打は水濁るは蛙鈴  
アキツム 素賀  
 柿の皮は薄ははり  
 凍水  
 月満くは法に庭竹  
酒 惚言  
 蛇餅は切毫ふらふは  
 櫻里  
御別  
 浦山は帆はるは月  
了る全 風柳

新よりの粟丸や後の月  
 新米と今年もよく穂引か  
 ともや色よくあつは所産  
 菊よしの新米は節の産  
 稲妻の皮の産研百り  
 新米や所産はよく村の  
 川のりよ産まふは  
 今中のよく別々目録  
 秀碩  
 肥後  
 緑米  
 同  
 此木  
 同  
 此木  
 同  
 泥亀  
 同  
 和石  
 今  
 東習

鶴鴿入尾の痛く石の音  
 稲舟の教や中して野の  
 立ちよと虫鳴も古くは  
 煙よの月と産むは産の  
 かり〜産むは又産まふは  
 遠産り小粒の末は道か  
 脇息よ角を眠るはの音  
 浮世の目地よ早るは今  
 肥後  
 東習  
 全  
 全  
 全  
 全  
 全  
 道可  
 深縹  
 白芝

此痛もくもく星の別

無倫

くもくもく見ゆ

名くもくもく

果

名くもくもく

後の月位

奇倦

んせくもくもく

無倫

名くもくもく

道可

徳人の名

不貫

甲子障子

深縷

深の日の影

道可

青烟明珠

無倫

菊さけくまの先づ人遠の  
うまらるるまのまのまのまの  
一向の條を分ふ神佛  
靈々一團の十兩の鯛  
濱拍うつは舟木は松丸  
軍屏風  
元服の後もゆゑの格氣坊  
佛

深縷  
不貫  
無倫  
道可  
不貫  
深縷  
道可  
無倫

鮎食まき兒桂さむ衣  
凡も隠まのる草此鶴  
洞蕭一糸の枕論  
霧霧の度を朝服撓  
貴荒もまのまのまの  
席為頃や鉢の提  
祓の日  
毒川

深縷  
不貫  
無倫  
道可  
不貫  
深縷  
道可  
無倫

神占や以乃胡燕郭公 深縷  
 所居の相立の海客名後 不貫  
 大般若饗養慈の膳乃教 無倫  
 精川や雷吹京ハ西海 道可  
 折曲し信以蓋ハ岸後 不貫  
 ちや一の月や海濱の水 深縷  
 志しゆき又の嶺家ハ驛旅 道可  
 佐也の舟ハ白馬系 無倫

ナ  
 緑毛龜の甲は高麗附白 深縷  
 千人ハ 名大ハ水鏡 不貫  
 打渡と船責布はむらど 無倫  
 席の業ハ 也也海鳥見 道可  
 印毒東百白 漢乃令 不貫  
 ち海常志人 漢乃 深縷



表六句

路辺のく亀の身は露の灰 冷水

雀の霜の心は紫の糟

竹を以て柳の心は枝の節

忘るゝと膝の底は琴の丸

灯の所は月面は貝の合

龍のわざふるは山は糖水

庭の葉の心は枝の葉の念が 石瓦

鬼の巻の掃雪の庵

白炭の俵の心は掃雪の庵

今日の都の井日正月

有明の脚の心は氣の

徳尾の巻の心は肉の身

ろくろの心は玉の散 袖雪

も毒の心は青の煎鍋

夕の静の心は静の心

身と長川萬城の如く  
 温泉の滝の如く  
 枯きくくわく 奇生山 藤  
 醉醒の迷ふ人の顔の皮  
 多子  
 一とせ 懼ふ河豚の美毒  
 急人よふふふふふふ  
 八九分わりのもの  
 月の影の如く  
 隣りよふふ松茸の苗

才三

風や文くくくく  
 子よあけり 淡茅 笹の  
 谷の湯氣 濕気 帯と 垢  
 毒中 柏きくくく 霧水  
 竹負  
 草とくくくく 蘭の 枯草  
 子よふ月 酒の 霧の 意の

榎のまやが葉刺し跡も一抱

蕉吟

実の生るがゆふそく釣魚  
夢の如く傾く村人の心

木の葉も表を知らぬ葉も

賀倫

傘ねらう雪乃白妙

流雲の如く駕り片舟清く

物々々々々々清く霞の

方室

玉櫃の凍も水晶乃る崖

詩作りも真亦よ今更

冬も雪く

雨漏り夜形らるる夜

洗車

心の中火焼と信也猫

髪ゆるる髪を髪を髪を

風や耳に流るる音

紅鳥

根世の如く炭竈の火氣

矢も中絶人の心も血も

と扇も二つに折れぬ中

波雪

はやくはやく霜の花

朗詠と風と竹琵琶弾

信しんもや藤ふじつる藤ふじの紙かみ袋ふくろ 之也

月つきの夜よは行ゆきかき風かぜ

酒さけの杯はっぴのうた詩うたの巻まき

因よとわさよ竹たけの都みやこの如ごと 銀行

みその水みづ菜なは味あじは味あじ

三さんのりりの魚うしほ雪ゆきの潜ひそせ

夕ゆふ日ひの山やまを登のぼりてふれはるる 醉柳

しんじくしんじくしんじく霜しも解との履つら

北きた陸りくの角かく切き牛うしの詰つめ買かい

如ごとく風かぜ成な鈴すず鴨鴨舌かみ藤ふじは 妬山

木き打う井いとれ志こころのうた

一ひと輪りんの毒どく小こ人ひと鼻はなを

山やまののちほくもる人ひと本ほんの葉は 弁翁

月つきの夜よは行ゆきかき風かぜ

酒さけの杯はっぴのうた詩うたの巻まき

志こころの魚うしほ雪ゆきの潜ひそせ 龍眠

因よとわさよ竹たけの都みやこの如ごと

みその水みづ菜なは味あじは味あじ

三さんのりりの魚うしほ雪ゆきの潜ひそせ

口舌 一 障子障子の町家 巴水

川裂入りよ水鳥の声

お火鉢産垢の煙立たて

葉の蔭親しむお古懐 季雲

明窓より見事のはな

身結ふ美樹宮より

駒木後庭の葉の掃見蹄より 元政

後御月も樹の早咲

鶴をよま春成物より

物照し松の深なる葉か 博元

庭掃りけしむ前庭すね

客の身は肉は火酒のたて

松の蔭よりささるる散るな 梅月

ふら仙の根とまのむら

平爐の火小魂肌を

反松や庭葉の海報より 得習

ねる海邊と腕の駕籠

玉色より小瀬より

儒父の月信や〜村竹飯

一餅

簀〜〜あ〜〜柴漬乃魚

田舎蟹腰〜檀乃枝指

和〜小底菜の洞が藤〜

青石

しら〜〜片成部〜岸焼

酒瓢搦男や〜〜新〜

園紗棚のた〜葉〜〜向菜

梅口

わ〜〜〜〜〜〜

物探〜〜仕下〜色〜

發句 冬部

蟬〜〜や梅の多感〜里

玉鯛

風〜〜人〜〜酒〜

志水

芦花〜〜於鶴向〜秋の浦

離桂

雄掃〜〜嫁〜〜

常和

夜半〜〜鳥帽〜〜

自言

雪〜〜川〜〜や中〜岸車

菊徑

因〜〜場〜〜

花夫

不<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>烟<sup>ノ</sup>友<sup>ノ</sup>和<sup>ノ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 川崎 雲川

潭<sup>ヲ</sup>法<sup>ス</sup>々<sup>ク</sup>蟹<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>後<sup>好</sup>好<sup>ク</sup>為<sup>ル</sup>潔<sup>ク</sup> 全

七<sup>ツ</sup>條<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>糸<sup>ノ</sup>半<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 同 東馬

い<sup>ハ</sup>河<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>女<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>合<sup>フ</sup>音<sup>ノ</sup> 昌泉

風<sup>ノ</sup>や<sup>も</sup>て<sup>テ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>月<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>圓<sup>ノ</sup> 賢倫

多<sup>ク</sup>も<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 素戔

物<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>色<sup>ノ</sup>が<sup>レ</sup>茶<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup> 南部 倫皆

垢<sup>ノ</sup>船<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>夫<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 士口

竹<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>も<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>高<sup>ノ</sup>屋<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup> 肥前 友水

之<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 凍水

真<sup>ノ</sup>松<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 全

之<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 東習

森<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 全

之<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 全

之<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 全

蛇<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>掃<sup>ノ</sup> 泥亀

風やちる遊む小藤原

梅里

山里の細いまのうらな

此本

ふかぬもわきを河原に

秀碩

木枯し露のびわくは

楓滴

念ふく流るる水

抱琴

田のひかりもさす

八角

初名やみま下土の道

全

高梨や折る山や長

越後  
英倫

初名やちるくは又使

八角

歌伎と作り木の葉の

梅月

野から枯く霜の身は

全

過ぎし海をわたり人

包抄

水色やて彩り此は

梅元

口切や下流ふじよ雪

由己

沙の首も然るを

扇峯

蜂折やたると流る

雨蔭



垢電くわでんの器がらと夜よの氷こほりの舟ふね 風重  
 吾わが鏡かがみの念ねんをを下くだりりの村むらの女を 掬水  
 用もちの車くるまの業わざ 秋あきの山やまの女を 流志  
 教しやくのく流りゅう鏝えんのく紅こう葉えつ 流志 卜風  
 名なのく白はく雲うん又また濡ぬ修しゆのく所しよ 十歳 蘭若  
 小こ月げつややもも少すく少すくのく細こ柳りゆう 三 倫志  
 山さん月げつややもものく房ぼう葉えつのく表へつ表へつ 我笑  
 流りゅうととりりもも禿かぶ舎しゃのく心しんのく柳りゆう

觀念くわんねんのく車くるまのく用もち 原倫  
 月げつのくまま婦ふ寒さむのく網あみ代しろ 花蝶  
 高たか葉えつのくやや雪ゆきのく世よのく末すえ 白芝  
 持もち也やのく持もちのく寺てらのく音ね 倫月  
 困こむ右みぎのく幕まくらのく換かのく霜しものく花はな 無倫  
 達たつのく心こころのく誰たれのく母ははのく汗あせ  
 弦しぜんのく月げつのく庭にわのく葉えつのく水みづのく色いろ 音

水もや後さくも舟の道

願成就と

揮 深き心鏡神の極

通油町  
四郎右衛門開板

